



夏休みの感想文ー「シン・ゴジラ」を観に行きました

これまでゴジラ映画は、ハリウッド製も含めて何十作と作られたようですが、ほとんどまともに観たことはありませんでした。当然のことながら、話がもともと荒唐無稽なものですし、どれも全体に画面が暗い印象で、好きなタイプの映画とはいえなかったからです。

でも、この8月、ちょっと余裕が出来たので、評判の「シン・ゴジラ」を観に行きました。今回のゴジラの何が「シン」なのかは知りませんが、ゴジラ映画にしては画面は明るく、この怪物が龍踊じやおどりの龍りゅうのようなコミカルな姿をとりながら成長し、辺りあたを破壊しながらあのよく知られたゴジラの完成体になってしまうのですが、危機に対応しようとする内閣や自衛隊の動きが結構リアルに描かれるかと思えば、決断出来ないまま重要な局面を逸いつしてしまう首相や、生物だから守らなくてはと官邸前でデモをする自然保護団体などがシニカルに描かれていて、それなりに楽しんで観てきました。

CGを駆使した画面は、昔のプラモデルを並べ立てた特撮とは違ってさすがに迫力があり、映画そのものが、かつてとはまるで違ってしまったようです。これでは勢い作る方も観る方も、更なる刺激を、更なる刺激をと求めるようになるのも、むべなるかなと思いましたが、そこです。

映画といえば、かつてこの大船キャンパスは、松竹映画社の大船撮影所。当時の様子を展示したコーナーも図書館棟に残され、小津安二郎監督や原節子さんの「東京物語」や木下恵介監督や高峰秀子さんの「二十四の瞳」を初め、日本映画史上の名立たる作品を偲ぶことが出来ます。世界の映画作品のベスト・ワンに選ばれたこともある「東京物語」は、私たちの親の世代がリアルタイムで観たものですが、「二十四の瞳」は、小学生の頃、学校で観せてもらった記憶があります。二十四という数は、イエスさまの十二使徒がモデルでしょうか。美しい小豆島の風景をバックに「上げば尊し」の歌声が印象的に流れ、女教師と子どもたちとの明るい師弟の交わりと、そのゆく末の何とも遣る瀬無い悲しい物語とを子ども心によく覚えています。

ところで、日独伊三国同盟前夜、来日したアーノルト・ファンク監督に見止められ、若干16歳で日独合作映画「新しき土」の主役に抜擢、完成後ドイツ国民に熱狂的に迎えられた原さんが活躍したのも、この大船撮影所。ナチス政権の稀代の宣伝相ゲッベルスと談笑、そして名作を残したままの突然の引退と、伝説的な女優の名声をほしいままにしました。私にとって原節子さんは、全てが物語で、女優の範疇だけにおさまらない、有形か無形か知りませんが、文化財的別格存在なのです。

さて、よく世界最後の日に何を食いたいかなどといわれますと、1食だけでは足りないので、せめて3日9食程度の猶予を与えてほしいと思ったりもしますが、映画も、これ1

作といわれますと、大いに困って、邦画3作、洋画3作、その他3篇ぐらいいわせても
らわなくては。

そこで、邦画では「七人の侍」(監督/黒澤明、主演/三船敏郎、志村喬)、「魔女の宅急
便」(監督/宮崎駿、アニメーション)、「男はつらいよ 寅次郎相合い傘」(監督/山田洋
次、主演/渥美清、浅丘ルリ子)。

洋画では「ドクトル・ジバゴ」(監督/デヴィッド・リーン、主演/オマー・シャルフ、
ジュリー・クリスティー)、「昼下がりの情事」(監督/ビリー・ワイルダー、主演/ゲーリ
ー・クーパー、オードリー・ヘップバーン)、「太陽がいっぱい」(監督/ルネ・クレマン、
主演/アラン・ドロン、モーリス・ロネ)。

番外篇として「007 ロシアより愛をこめて」(監督/テレンス・ヤング、主演/ショ
ーン・コネリー、ダニエラ・ビアンキ)、「グラン・プリ」(監督/ジョン・フランケンハイ
マー、主演/ジェームズ・ガーナー、イヴ・モンタン、三船敏郎)、「ひまわり」(監督/ヴ
ィットリオ・デ・シーカ、主演/マルチェロ・マストロヤンニ、ソフィア・ローレン)。こ
れで9作品。すみません、もう1つ入れさせていただきます、「めぐり逢い」(監督/レオ・マ
ッケーリー、主演/ケーリー・グラント、デボラ・カー)。

今の学生諸君は、どれも知らないものばかりでしょう。特に「めぐり逢い」など、携帯
電話があったら、絶対に成立しない話ですので、便利になるということは、物語が消失す
るということかも知れません。ひょっとすると、恋愛小説が現代売れなくなった理由の一
つも、この辺りにあるのかも。それは、人間にとって幸せなことなのか、不幸せなことな
のか、ビミョーってということなのでしょうね。

[>前のページへ戻る](#)